



鳥取における最初の上水道は、寛永9（1632）年に池田光政による城下町整備の一環として整備されましたが、これは城と一部の武家屋敷だけに給水するもので、地域全体へ給水を開始したのは大正時代に入ってからです。

明治後期、鉄道、電気、電話などの社会資本整備が進むなかで、鳥取市民の飲料水の確保と公衆衛生の向上を主な目的とした上水道についても近代的な施設が検討されるようになり、大正4年（1915年）鳥取市技師長三田善太郎の計画・設計に基づいて美歎水源地が建設されました。しかし、水源地の完成から3年後の大正7年9月、鳥取を襲った台風による洪水で土堰堤が55mにわたって崩壊、死者8人、流失家屋10戸という大被害をもたらしました。

その後、復旧・改修が行われ、大正11年（1922）に高さ27m、堤頂長103mの新たな堰堤が完成し、半世紀以上にわたって「鳥取の水がめ」の役割を果たしてきましたが、残念ながら、千代川伏流水を水源とする叶水源地の完成などにより昭和53年（1978）に機能を休止、加えて殿ダムへの利水参加で廃止となりました。

旧美歎水源地水道施設は、山陰地方で最初に建設された近代水道施設の代表的遺構で、貯水池のほか量水施設や濾過施設なども良好な状態で保存されていることから、近代水道施設の構成を知る上で高い歴史的価値が認められています。

施設は、貯水池堰堤を中心として上流の美歎川上流量水堰及び通り谷量水堰、下流の濾過池、接合井及び量水器室により構成されています。貯水池堰堤は重力式コンクリート造堰堤で、濾過池は一号から五号までを南北に配し、制水井を附属しています。

## ■位置図



美歎砂防堰堤（上流面）



旧美歎水源地（現・砂防堰堤）

粗石モルタル表面石張りの重厚な水源地堰堤は、上流側の補強、中央部の切り下げなどの改修を施し、砂防堰堤へと生まれ変わった。



量水器室跡